

# 千葉市六通神社南遺跡出土の槍先形石器について

島 立 桂

## 目 次

はじめに .....	3
1 六通神社南遺跡出土の槍先形石器群について .....	3
2 槍先形石器群の関連資料について .....	6
3 六通神社南遺跡出土の北方系細石刃石器群について .....	9
4 東向遺跡出土の槍先形石器群について .....	12
5 遠隔地の石材と石器群の地域性について .....	15
おわりに .....	16

## はじめに

千葉市緑区おゆみ野に所在する六通神社南遺跡は、現在のUR都市機構（旧日本住宅公団・住宅都市整備公団・都市基盤整備公団）による千葉東南部地区土地区画整理事業（千葉東南部ニュータウン）に伴い、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧財団法人千葉県文化財センター）によって、1983年度・1990年度・1996年度・1997年度の4か年にわたり42,800㎡の発掘調査が行われ、旧石器時代から平安時代に至る遺構・遺物が検出された遺跡である。このうち、1983年度及び1990年度の発掘調査では、千葉県内で事例の少ない神子柴系石器群の槍先形石器がまとまって出土した<sup>1)</sup>。

発掘調査報告書を作成する際、槍先形石器の一部について、京都大学原子炉研究所の藁科哲男に蛍光X線による石器石材の原産地推定分析を依頼したところ、奈良県二上山産サヌカイトと岐阜県湯ヶ峰流紋岩（下呂石）との結果が得られた<sup>2)</sup>。報告書にも分析結果は掲載したが、その成果を踏まえた考察はできず、別の機会に若干の検討を行っただけであった<sup>3)</sup>。

六通神社南遺跡の報告書を作成して10年後、今度は八千代市吉橋に所在する東向遺跡の整理作業に携わることになった。この遺跡は、UR都市機構による西八千代北部地区土地区画整理事業に伴い、1997年度から2011年度にかけて、153,978㎡に及ぶ発掘調査が行われ、旧石器時代、縄文時代、平安時代等の遺構・遺物が検出されている。このうち、2005年度の発掘調査では、土器出現期に帰属する可能性が高いものの、神子柴系石器群とは異なる様相を呈する石器群が出土し、その成果を報告した<sup>4)</sup>。

今回、この両石器群を改めて検討し、派生する問題について考えてみたい。

## 1 六通神社南遺跡出土の槍先形石器群について

六通神社南遺跡は、東京湾に流れ込む都川と村田川に南北を画された、標高40m～50mほどの台地上に立地する。1983年度に31,700㎡の発掘調査が行われ、立川ローム層の直上にある暗茶褐色土層の下部を中心とする層準から、槍先形石器29点（28個体）、槍先形石器調整剥片33点、削器2点、剥片類4点、石核4点、礫12点の合計84点が、相互に隣接した直径10m～15mほどの散漫なブロック3か所とその周辺から出土した。石器石材は、安山岩42点（槍先形石器22点、槍先形石器調整剥片15点、剥片1点、石核4点）、ガラス質安山岩20点（槍先形石器6点、槍先形石器調整剥片14点）、東北産頁岩3点（槍先形石器調整剥片3点）、嶺岡産頁岩2点（削器1点、剥片1点）、チャート1点（使用痕ある剥片）、ホルンフェルス3点（槍先形石器1点、槍先形石器調整剥片1点、削器1点）、不明1点（剥片）として報告した。

1990年度は、1983年度の調査区に隣接する7,100㎡の発掘調査が行われ、安山岩による槍先形石器（破片）1点と、東北産頁岩による石器群として、搔器1点、削器2点、削片1点、剥片類17点、石核1点などが、上層遺構の検出面（立川ローム層Ⅲ層上面付近）や遺構覆土中から出土した<sup>5)</sup>。

この2か年の発掘調査によって出土した槍先形石器は、欠損品あるいは再加工作品が多く、大半は製作当初の形状を保っていないと判断されるが、大型扁平で、最大幅が中央ないしは基部寄りにある両面調整の木葉形、あるいは柳葉形を呈すと想定される一群であることから、長野県南箕輪村神子柴遺跡や同栄村横倉遺跡などを典型とする神子柴型尖頭器の範疇と考えた。

出土した槍先形石器30点（29個体）のうち8点について、蛍光X線分析を実施したところ、奈良県二上山産サヌカイト4点（第1図8・9・19・21）、岐阜県湯ヶ峰流紋岩（下呂石）4点（第2図34～37）と

の結果を得ることができた。その成果を受けて、分析を行わなかった資料についても肉眼観察により検討し、サヌカイト23点（22個体）、下呂石6点、ホルンフェルス1点に分類した。

はじめに、槍先形石器の形態的特徴について検討する（第1図1～22、第2図33～38・52）。

第1図1～22は、報告時に「安山岩」と分類し、蛍光X線分析により二上山産サヌカイトと判定された石材と、肉眼観察により同種と判断した石材による槍先形石器である。

1は、製作当初の形状を残すと考えられる数少ない完成品のひとつで、先端が鋭く尖る扁平な木葉形である。表裏両面とも平坦な調整加工により、横断面は薄く均整の取れた凸レンズ形を呈す。石器の周縁に見られる細かな調整加工は表裏とも均等で、縁辺は薄く鋭利に仕上げられている。2も、表裏両面が平坦な調整加工によって製作されており、両側縁は薄く鋭利である。ただ、先端、基部ともに丸みを帯びた釣鐘形を呈しており、刺突具としての機能は想定できない。下端に折れ面が小さく残ることから、欠損品を再加工した未成品と考えたが、須藤隆司の指摘どおり<sup>6)</sup>、側縁を機能部位とする切削具と考えた方が妥当であろう。7は、上下両側が欠損する、柳葉形と想定される槍先形石器である。表裏両面とも平坦な調整加工によって製作されており、横断面は均整の取れた凸レンズ形を呈する。縁辺は薄く鋭利で、1・2と共通する。なお、この石器は、槍先形石器で唯一、1990年度の発掘調査で出土したものである。

3～5は、槍先形石器の先端部破片である。3・5は、表裏の調整加工が均等であるが、4は、横断面が台形を呈しており、裏面から表面に向けた再加工によって、製作当初よりも幅の狭い形状に作り変えられた可能性がある。ただし、欠損後の再加工は見られない。

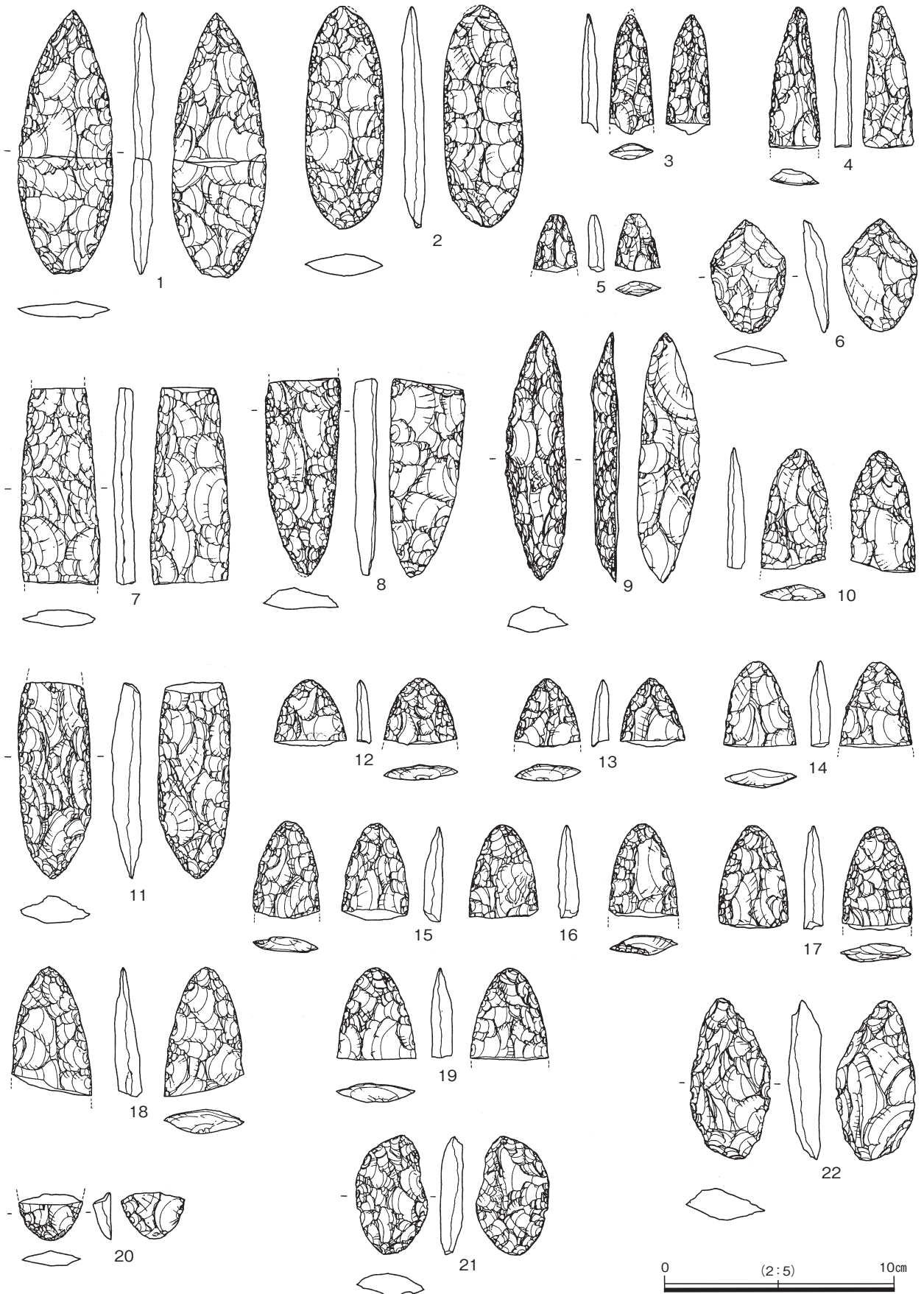
6は、槍先形石器の基部破片を再加工して、短い三角形の先端が作られた石器である。先端及び縁辺は薄く鋭利である。

8は、上半部を欠損する、柳葉形の槍先形石器である。両側縁には、裏面からの細かな調整加工が見られる。1・2・7の縁辺は、薄く鋭利で、表裏とも均等であるのに対し、8の縁辺は、平坦な裏面に対して、表面はやや急角度の細かな剥離面が連続しており、削器の刃部のような形状である（横断面は、第4図71の削器に類似する）。平面形は、右側縁が直線的、左側縁が緩やかな弧状を呈しており、わずかながら左右非対称であることを含めて、槍の穂先ではなく、側縁を機能部位とする切削具と考えられる。裏面の上端には、折れ面からの細かな調整加工が見られる。11も平面形態の類似する資料であるが、表裏の調整加工に明瞭な差は見られず、8とは性格の異なる石器かも知れない。

9は、両端が鋭利な細身の槍先形石器である。平面形は、右側縁が直線的、左側縁は緩やかな弧状を呈する柳葉形で、わずかに左右非対称である。両側縁は、裏面からの急角度な調整加工が施されており、横断面は台形を呈し、全体に三面加工の角錐状石器のような形状となっている。裏面は平坦で大きな剥離面に覆われ、表面中央にも同様な剥離面が部分的に見られることから、当初は横断面が均等な凸レンズ形であったものが、裏面から表面への急角度な再加工によって幅が大きく減ぜられたと考えられる。ただし、再加工された石器は、刺突具と見るべきか、側縁を刃部とする切削具と見るべきか、即断できない。

この他に、先端部か基部か判定困難な欠損資料が9点（10・12～19）ある。いずれも、欠損後に再加工された形跡はなく詳細は不明であるが、縁辺は薄く鋭利で、横断面が均質な凸レンズ形を呈しており、2のような形態の石器の一部であった可能性がある。

20は基部破片、21・22は未成品と考えられる資料である。21の下端には2と類似する折れ面が小さく残されている。一方、上半部は上端からの調整加工により弧状を呈することから、細石刃核の母型の疑いがないわけではないが、いずれにしても再加工品と想定される。



第1図 千葉市六通神社南遺跡出土石器実測図1

第2図23～32もサヌカイトと同種の石材による資料である。23・24は、相互に接合する石核と剥片、25～32は槍先形石器の調整剥片である。実測図を掲載していない資料を含めて、いずれも小型品で、最終的な調整ないしは再加工に伴って生じたものと判断される。

33～50は、報告時に「ガラス質安山岩」と分類し、蛍光X線分析によって下呂石と判定されたもの（34～37）と、肉眼観察により同種と判断した石材による石器である。33～38は槍先形石器、39～50は槍先形石器の調整剥片である。

33は小型の完形品であるが、9と類似した形状を呈している。表面中央には、裏面と平行する剥離面があり、これが当初からの剥離面と見られることから、横断面が均整の取れた凸レンズ形の形態だったが、欠損後、側縁部を中心に、裏面から急角度の調整加工がなされ、形状が大きく変化したと考えられる。34は、槍先形石器の欠損品である。横断面は凸レンズ形を呈しており、表裏とも比較的均等の調整加工となっている。また、下半部が折損後、折れ面に接して細かな調整加工がなされている。

37は、上端が丸みのある釣鐘形、下端部には折れ面が小さく残る槍先形石器である。横断面は薄く均整の取れた凸レンズ形を呈しており、大型扁平な槍先形石器の基部破片に対して、上下を逆にして下半部を集中的に再加工したと想定される。

39～50は槍先形石器調整剥片である。サヌカイトによる調整剥片と同様、全て小型品で、主に石器の再加工によって生じたと考えられる。

以上のとおり、当該石器群は、両面調整による大型の槍先形石器群で、鋭利な先端部をもつ刺突具と、多様な側縁部をもつ切削具という、大局2群からなると想定される。また、製作当初は、石材の違いを越えて、比較的類似した形態的特徴を持っていたと考えられるが、全体の1/3ほどの石器に、状況に応じた再加工がなされていた。

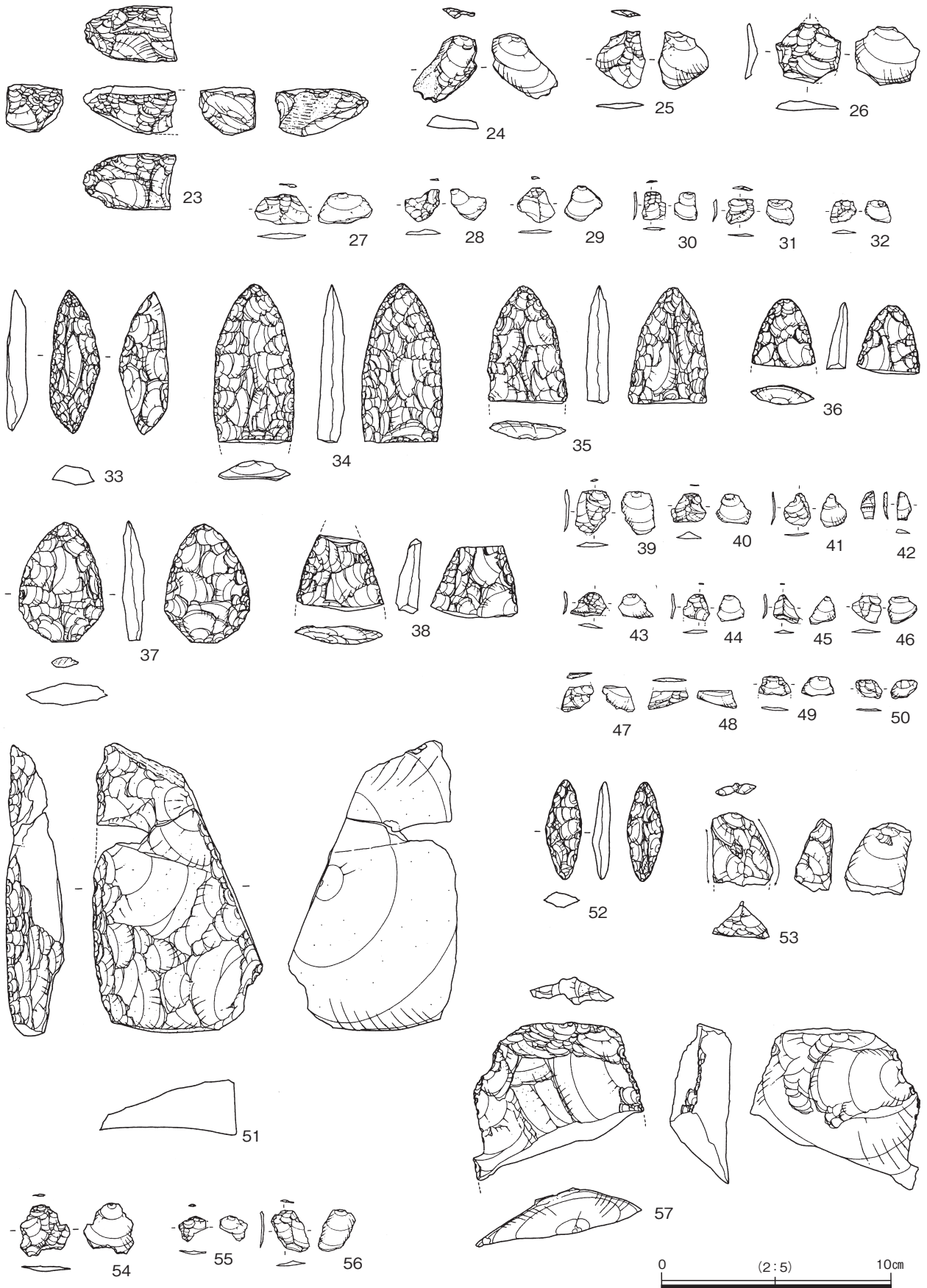
なお、サヌカイト、下呂石とは異なる石材の石器に、ホルンフェルスによる小型柳葉形の槍先形石器1点（52）と大型の削器1点（51）、嶺岡産頁岩による大型の削器（欠損品）1点（57）と使用痕ある剥片1点（53）、東北産頁岩による槍先形石器調整剥片（54～56）がある。東北産頁岩の剥片については、上記の槍先形石器群と分布域が重なっていること、後述する北方系細石刃石器群の石質とは質感が異なることから、槍先形石器群に伴うと判断した。一方、神子柴系石器群に通有の石斧や彫搔器等を含む石刃石器群は出土していない。

## 2 槍先形石器群の関連資料について

六通神社南遺跡の槍先形石器は、産地不明のホルンフェルス製小型品1点を除くと、二上山産サヌカイトと下呂石によって製作されたと推定されたが、報告書作成当時、下呂石については、岐阜県下呂市大林遺跡群（大林C・D遺跡）において、表採資料が中心ではあるものの、槍先形石器の製作に関連する原産地遺跡が確認されていた<sup>7)</sup>。また、神子柴遺跡から出土した槍先形石器の中で最大のものが下呂石産とされ、当該期の石器が原産地を離れて消費地に持ち運ばれていることも判明していた。

しかし、サヌカイトについては、石器石材の原産地と想定された二上山周辺において、瀬戸内技法に関連するナイフ形石器を中心とする石器群は多量に見つかったものの、大型の槍先形石器については、単独出土資料が散見されるにすぎなかった<sup>8)</sup>。

その後、2020年に報告された奈良県三郷町勢野東遺跡から、大型の槍先形石器の製作に関連する資料が



第2図 千葉市六通神社南遺跡出土石器実測図2

大量に出土し、二上山の周辺地域においても、土器出現期の大型の槍先形石器が製作されていたことが明らかとなった<sup>9)</sup>。ただし、当該遺跡では、槍先形石器の製作初期の工程を示す資料は見られず、石材原産地において製作された石器素材や未成品がもたらされ、完成品に加工された後、消費地へと運ばれた中継地の遺跡<sup>10)</sup>なのであろう。



第3図 成田市円妙寺遺跡・野田市本郷遺跡A地点出土石器実測図

神子柴系石器群は、大型扁平な槍先形石器を特徴とし、刃部磨製石斧や石刃石器群などにより構成されるが、千葉県内においては関連資料がきわめて乏しい。大型の槍先形石器や石斧など、神子柴系石器群を構成する各要素が単独で、あるいは数点が出土する事例は散見されるものの、そのいくつかが組合さって出土した事例となると、成田市円妙寺遺跡<sup>11)</sup>、野田市本郷遺跡A地点<sup>12)</sup>を挙げうるにすぎない。

第3図58～64は、円妙寺遺跡出土の石器群である。各石器は散漫なブロックから出土しており、そのすべてが搬入品と考えられる。

58・59は、安山岩による中型木葉形で最大幅が基部寄りにある槍先形石器である。鋭利な先端部と丸い基部をもち、小振りながら、神子柴型尖頭器の一種と見ることができる。60は東北産頁岩による搔器、64は東北産頁岩による大型の石刃である。石器群は槍先形石器と石刃石器群との組み合わせであり、石斧は見られないものの、神子柴系石器群の一例と考えられる。

65～70は、本郷遺跡A地点出土の石器群である。65・66は、安山岩、頁岩による槍先形石器、67は搔器、68～70は片刃の石斧である。槍先形石器は小振りであるが、66は、円妙寺遺跡の58・59に通じる形態と見られる。

当該期の安山岩系石材による槍先形石器は、単独資料を含めて、比較的類似した形態を呈している。ただし、千葉県内で、六通神社南遺跡のようにまとまった量の槍先形石器が出土した例はなく、また、再加工によって形状の変化している例も見られない。

神子柴遺跡や横倉遺跡のように各種石器の完形品がまとまって出土した遺跡と異なり、槍先形石器の欠損品や再加工品が搬入品の主体となっていることは、消費地遺跡のひとつのあり方なのだろう。

### 3 六通神社南遺跡出土の北方系細石刃石器群について

六通神社南遺跡では、1990年度の発掘調査によって、東北産頁岩による石器群が出土した。主な資料は第4図のとおりである。

第4図71は、両側縁に細かな調整加工のある削器である。表面は、多方向からの一次面に覆われており、縦長ではあるが、石刃とは異なる大型の剥片を素材としている。72は、端部に刃部をもつ搔器である。71と同様、表面は、多方向からの剥離面に覆われている。71及び72の素材剥片については、縦断面が大きく湾曲する典型的な形状とは言えないものの、表面に残された剥離面の状況から、両面調整体由来だと考えられる。

73は、横断面が台形の削片である。打面が小さく潰れており、その周辺部の様子ははっきりしないものの、細石刃核の打面形成ないしは打面再生に伴うものと判断される。74・75・77・78は、両面調整体を製作する際に剥離された調整剥片類と考えられる。76は、小型の剥片を剥離した石核であるが、両面調整体の欠損品を利用した可能性がある。

六通神社南遺跡では、細石刃、細石刃核、荒屋型彫器、角二山型搔器など、帰属時期の限定される特徴的な石器は出土しなかったが、東北産頁岩を利用し、搔器、削器の素材が両面調整体由来すると想定されること、細石刃核の打面形成や器体成形に関与した可能性の高い削片、剥片類が見られることから、千葉県では佐倉市木戸場遺跡<sup>13)</sup>、成田市東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）<sup>14)</sup>、大網白里市升形遺跡<sup>15)</sup>などに代表される、湧別技法札滑型細石刃核を指標とする北方系細石刃石器群の一部と見られる。

次に問題としたいことは、隣接する調査区から出土した神子柴系石器群との関係についてである。

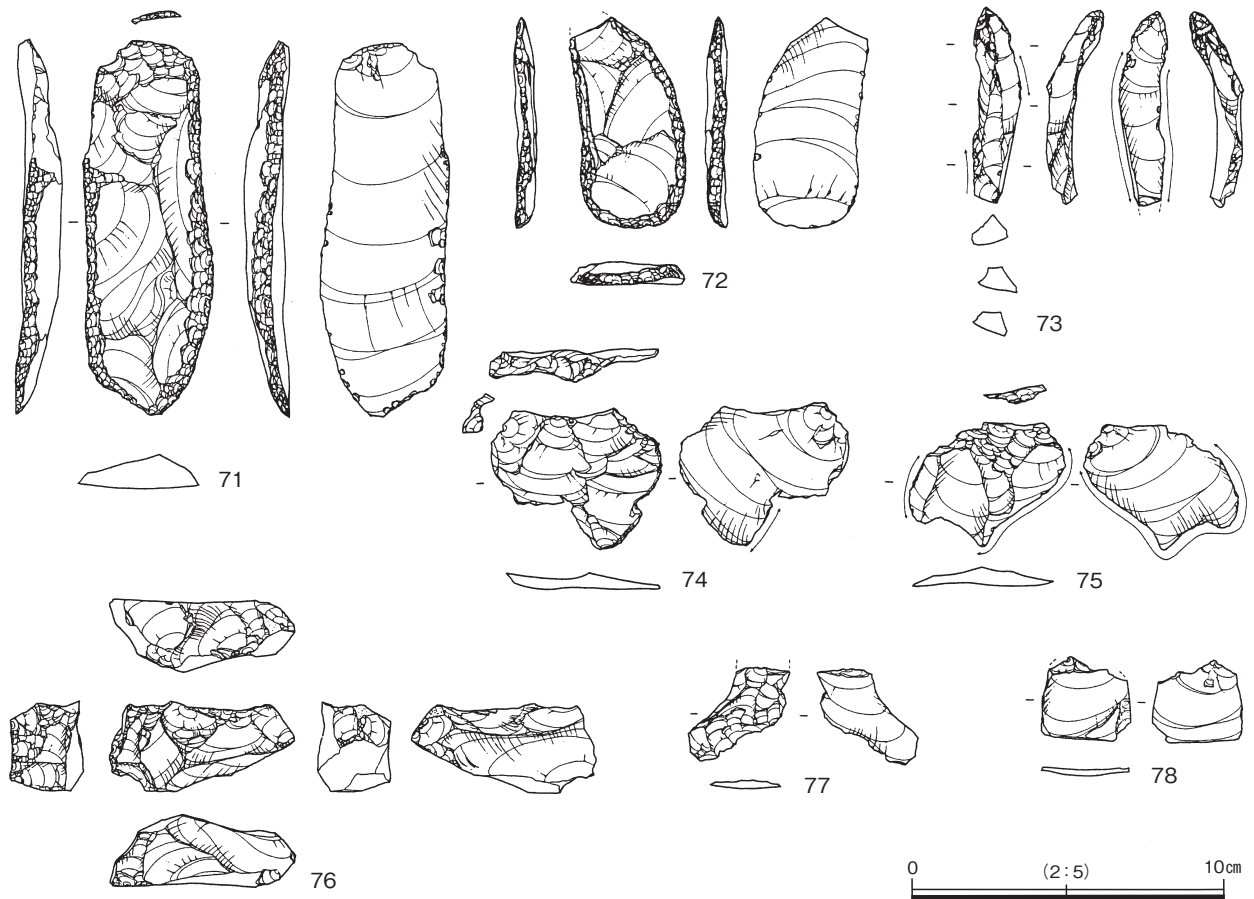
関東地方、特に神奈川県では、神子柴系石器群に北方系細石刃石器群が伴うことから、六通神社南遺跡についても、報告書作成時には、両者が共存する可能性を排除しきれずにいた。

しかし、茨城県ひたちなか市後野遺跡<sup>16)</sup>では、神子柴系石器群及び北方系細石刃石器群が出土しているものの、両者は平面分布及び出土層位が異なっており、それぞれ別個の石器群と捉えられている。六通神社南遺跡では、神子柴系石器群と北方系細石刃石器群との出土層位の違いを明らかにすることができず、手掛かりは乏しいが、後野遺跡の事例や、千葉県内、あるいは埼玉県深谷市白草遺跡<sup>17)</sup>、山形県大石田町角二山遺跡<sup>18)</sup>等、各地の関連資料において、東北産頁岩を多用する北方系細石刃石器群（湧別技法札滑型細石刃核）に大型の槍先形石器の共伴事例は見られないことから、現状では、通説どおり、両者は時期が異なると考えている。

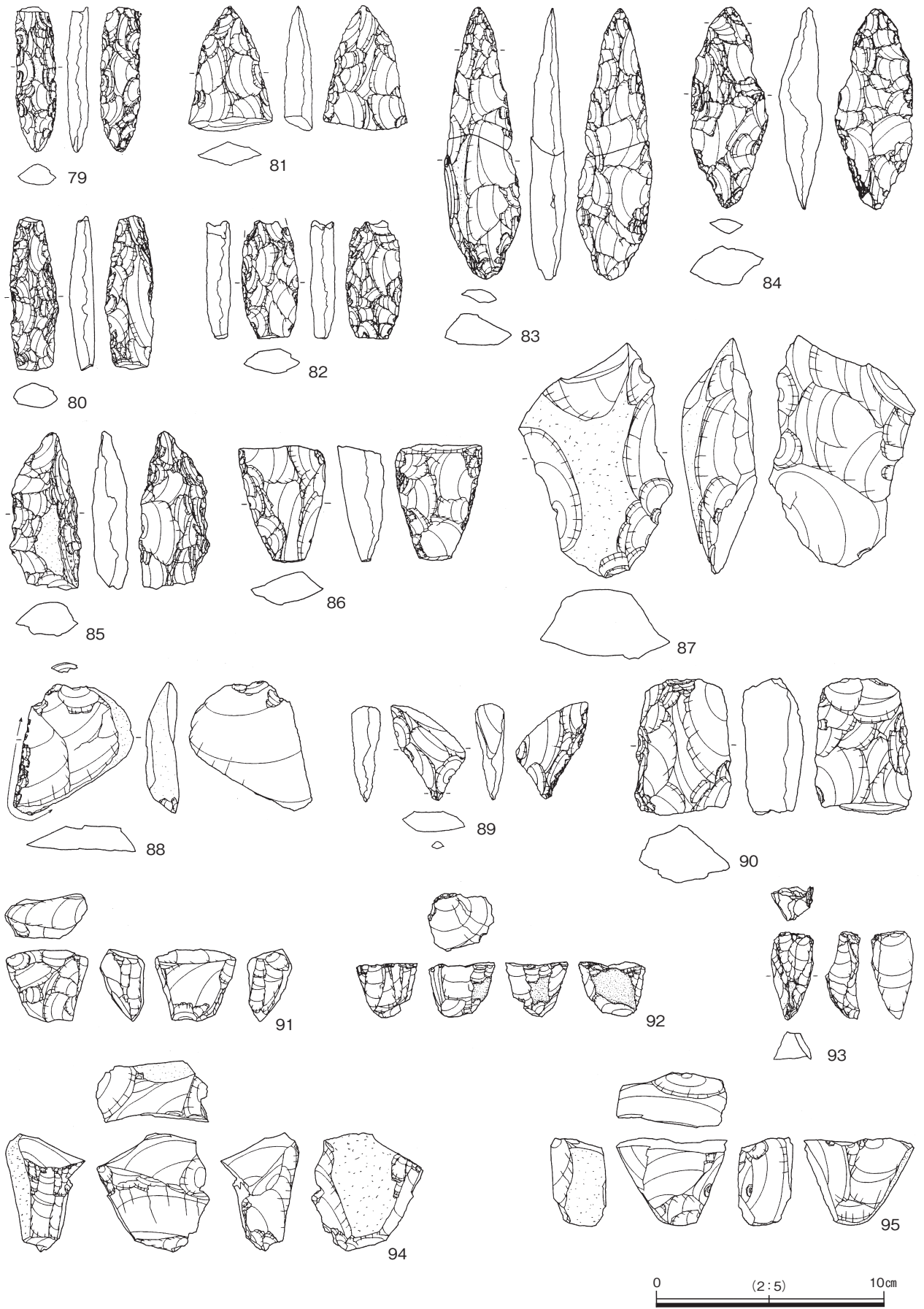
その一方で、君津市向郷菩提遺跡<sup>19)</sup>では、細身の槍先形石器、石斧などとともに、両面調整体由来する細石刃核が出土している。

第5図79～87は、安山岩、頁岩類、ホルンフェルスによる槍先形石器である。79～82は、概ね完成品の欠損資料と考えられるものの、それ以外は、いくつかの工程の未成品と見られる。

79・80は、本ノ木型尖頭器に分類される細身の槍先形石器で、帰属時期の限定される特徴的な石器である。この他に、削器（88）、錐（89）、石斧（90）がある。



第4図 千葉市六通神社南遺跡出土石器実測図3



第5図 君津市向郷菩提遺跡出土の石器実測図

91～95は、細石刃石器群の関連資料で、特に91は、両面調整体を分割して打面を形成した、湧別技法に関連する細石刃核と考えられる。

石器石材に、黒色頁岩やホルンフェルス、安山岩、嶺岡産頁岩等、千葉県南部に由来すると推定される石材が主体的に用いられている。一方で、遠隔地産の東北頁岩や荒屋型彫器、石刃等は見られない。

槍先形石器と近在産の石材による両面調整体由来の細石刃核をもつ石器群は、神奈川県内の諸遺跡で類例が見られ、神子柴系石器群のひとつと考えられている。大和市長堀北遺跡第Ⅱ文化層<sup>20)</sup>、綾瀬市寺尾遺跡第Ⅰ文化層<sup>21)</sup>など、木葉形の槍先形石器群が一群をなし、また、相模原市勝坂遺跡第45次調査<sup>22)</sup>で出土した、細身の槍先形石器や有茎尖頭器類似の資料をもつ一群も関連資料と考えられる。

神子柴系石器群は、大型の槍先形石器と石斧、搔器、削器類、彫器などに加えて、地域により違いはあるが、湧別技法に由来する細石刃核が伴っている。向郷菩提遺跡の出土資料は、未成品等が圧倒的に多く、石器の形態的特徴も不明な点が多いものの、完成品ないしはそれに近いと考えられる形態は、千葉県内で出土例の多い本ノ木型尖頭器と見られ、勝坂遺跡第45次調査の出土資料も関連する可能性が高い。

一方、地域は異なるが、新潟県村上市樽口遺跡<sup>23)</sup>では、黒曜石による湧別技法白滝型細石刃核と槍先形石器が出土している。荒屋型彫器は見られない。新潟県あるいは山形県において、東北産頁岩を多用し、荒屋型彫器、角二山型搔器を組成に持ち、大型の槍先形石器を伴わない遺跡が見られる一方で、樽口遺跡のような例も見られることから、北方系細石刃石器群の中に時間的な変化があると考えられる。

従って、北方系細石刃石器群は、①湧別技法札滑型細石刃核、荒屋型彫器、角二山型搔器をもち、東北産頁岩を多用する一群と、②湧別技法ないしはその変容した形状の細石刃核と槍先形石器をもち、荒屋型彫器等は伴わず、東北産頁岩を用いない一群があり、大局的には前者から後者へ変化したと考えられる<sup>24)</sup>。

千葉県内の出土事例では、木戸場遺跡→向郷菩提遺跡へと時間的に推移したと想定され、後者から神子柴系石器群と北方系細石刃石器群との密接な関係が想定されるものの、六通神社南遺跡の出土資料については、前後二時期の石器群と考えられる<sup>25)</sup>。

#### 4 東向遺跡出土の槍先形石器群について

千葉県では、土器出現期に、円妙寺遺跡や本郷遺跡A地点のような、東日本に広く分布する神子柴系石器群と共通する石器群が見られる一方で、多古町林小原子台遺跡や向郷菩提遺跡の出土石器群など、田村隆が、東部関東における「長者久保－神子柴石器群」の分析をとおして提示された、典型的な神子柴系石器群とは趣を異にするものの、同時期と想定される石器群がある<sup>26)</sup>。また、以下に提示する東向遺跡第7文化層も、関連する資料と考えられる。

東向遺跡第7文化層の石器群は、六通神社南遺跡と同様、立川ローム層Ⅲ層上面ないしはその直上の暗褐色土層下部付近を中心に包含され、16m四方ほどの範囲から、槍先形石器10点、搔器17点、削器2点、楔形石器1点、剥片類66点、石核12点、礫3点が出土した（第6図、第1表）。なお、千葉県内の遺跡では、この立川ローム層直上層を中心に包含される石器群については、堆積状況が安定しないため、共伴関係にあるか否かの問題が絶えず付きまとうが、ここでは各資料が同時期という前提で検討する。

第6図96は、黒色頁岩による槍先形石器である。やや厚手ではあるが均整のとれた柳葉形で、基部は逆三角形に作られている。97、99は頁岩、98は流紋岩による槍先形石器の欠損品であるが、細身の形状をした基部破片と考えられる。

100～102は、凝灰岩、ホルンフェルスによる木葉形の槍先形石器であるが、全体に調整加工が粗く、厚手で縁辺が鋭利でないことから、未成品と見られる。103・104は、安山岩によるもので、厚手の剥片の先端部を中心に調整加工した、尖頭削器ともいべき形態である。105は、安山岩による両面調整の槍先形石器（欠損品）で、欠損後に折れ面からの再加工が見られるが、どのような石器を意図したかは不明である。

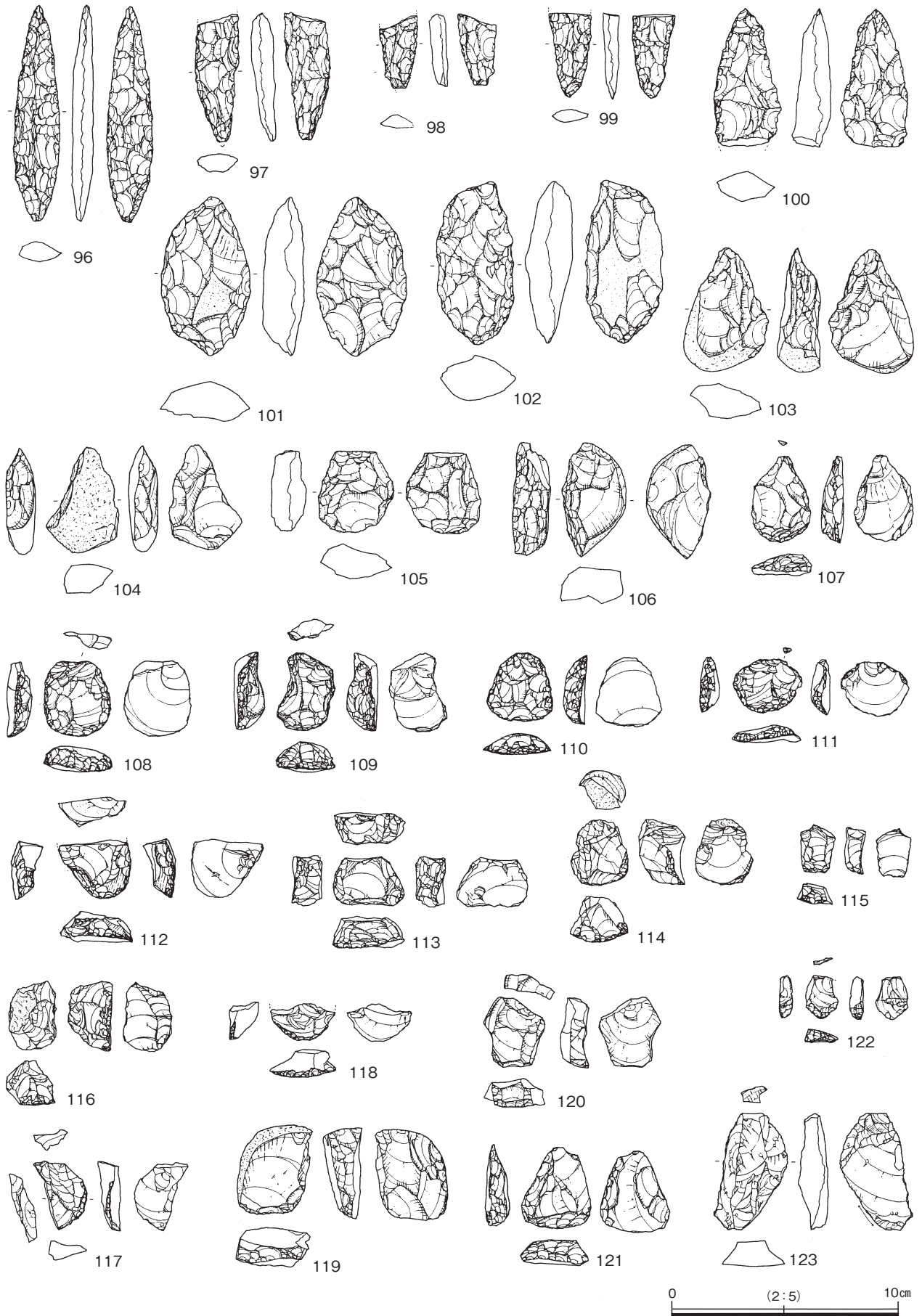
106は削器、107～122は、各種石材による一般的な剥片を素材とした搔器である。112～114は、嶺岡産頁岩で、3点が互いに接合するが、それ以外は単独の母岩と考えられる。

石器石材は、槍先形石器が安山岩、流紋岩、頁岩、凝灰岩、ホルンフェルス、搔器は、黒曜石、安山岩、流紋岩、頁岩、ホルンフェルス、玉髓などで、多種多様な石材が少しずつ用いられている（第1表）。黒曜石製の石器、剥片類は、肉眼観察ではあるが、信州産や箱根畑宿産、伊豆柏峠産、神津島産と推定されるものが少量ずつ含まれている。安山岩は、青みがかった灰色で、北関東産と想定される一群と、赤みがかった暗褐色に風化し、原石が拳大程度の、河川下流域（あるいは礫層）に産出する円礫の一群、頁岩は、嶺岡産の珪化したものが多く、黒曜石や安山岩、頁岩の一部を除くと、千葉県南部において調達可能な石材が多いと見られる。また、槍先形石器や搔器、剥片類、石核に至るまで、単独母岩の占める割合が高く、母岩分類のできなかった安山岩を除くと、大半が搬入品と判断される。石刃、石刃素材の石器は見られない。

以上、当該石器群は、向郷菩提遺跡とともに、神子柴系石器群というよりは、富里市南大溜袋遺跡、柏市元割遺跡、千葉市弥三郎第2遺跡など<sup>27)</sup>と関連する、本ノ木型尖頭器石器群と言った方が良いかもしれない。

第1表 八千代市東向遺跡第7文化層石器石材組成表

	槍先形石器	搔器	削器	楔形石器	Rf	Uf	剥片	石核	礫	合計
黒曜石（和田）							2			2
黒曜石（箱根）				1						1
黒曜石（伊豆）		1								1
黒曜石（神津）					1	4				5
黒曜石（不明）							1			1
安山岩	3	3	2		2		22	3		35
流紋岩	1	3								4
頁岩（東北）		1					1			2
頁岩（栃木北部）							1			1
頁岩（嶺岡）		5			1		3	1		10
頁岩（珪質）		1					1			2
頁岩（黒色）	1						1			2
頁岩（その他）	2					1	3	1		7
凝灰岩	1									1
チャート							2		1	3
砂岩					2		3	1	1	7
ホルンフェルス	2	1					10		1	14
玉髓		2			1		4	6		13
合 計	10	17	2	1	7	5	54	12	3	111



第6図 八千代市東向遺跡第7文化層出土の石器実測図

この点について、土器出現期初期の石器群は、神子柴系石器群と総称され、大型扁平で木葉形の槍先形石器と石斧、石刃石器群によって構成される典型的な一群が東日本一円に広く分布し、関東地方から中部地方にかけては、本ノ木型尖頭器を指標とする石器群が後続すると考えられている。しかし、本ノ木型尖頭器を含めた多様な形態の槍先形石器と、一般的な剥片による搔器、削器類、石斧などで構成される一群が、湧別技法の変容した細石刃石器群とつながりを持っていたことを重視すると、神子柴系石器群と本ノ木型尖頭器石器群とは、一部併存する可能性が考えられる。

## 5 遠隔地の石材と石器群の地域性について

千葉県の、特に旧石器時代遺跡が数多く分布する下総台地では、石器に適した石材が見られない。したがって、ナイフ形石器を主体とする石器群では、各地の石材が持ち込まれている。この石材の分布と活動範囲とは、密接に関連すると考えられている。

例えば千葉市を起点に見ると、嶺岡産頁岩の産出地域や安山岩、流紋岩、頁岩類、チャート、砂岩、ホルンフェルス等各種石材を含む上総丘陵砂礫層とは40km～60kmの距離があり、栃木県高原山（黒曜石）やその周辺（流紋岩、頁岩、凝灰岩等）、茨城県北部、久慈川流域（トロトロ石、玉髓、頁岩）、群馬県の武尊山や利根川上流域（安山岩、黒色頁岩）などとは150km～180kmとなる。当時の人々は、南北200kmの範囲を季節的に周回移動し、それに伴って原石を採取して、石核や石器の素材として携帯したことが、千葉県内の遺跡形成に反映していると想定される。

一方、立川ローム層Ⅸ層上部やⅥ層の石刃石器群、Ⅲ層の槍先形石器、野岳・休場型細石刃核を指標とする石器群の一部に信州産黒曜石（長野県八ヶ岳周辺や和田峠）、立川ローム層Ⅶ層～Ⅵ層の大型石刃、Ⅲ層の槍先形石器群の一部、北方系細石刃石器群には東北産頁岩（福島県西北部～山形県南部）など、関東山地を越える、千葉市からの直線距離で200kmを上回る遠隔地の石材が用いられている。

ナイフ形石器群については、季節的周回移動を基本として、環境の変化による移動範囲の変更に伴って、遠隔地の石材が持ち込まれたと考えられるが、槍先形石器群や細石刃石器群については、原産地に強く依存した石材構成であり、移動範囲や移動の契機が変化した可能性が考えられる。

関東地方の事例ではないが、神子柴系石器群と近接、ないしは概ね同時期の、北方系細石刃石器群では、東北地方日本海側の遺跡から出土した黒曜石について蛍光X線分析が行われており<sup>28)</sup>、山形県大石田町角二山遺跡出土の黒曜石は北海道白滝産、秋田県男鹿産、同小国町湯の花遺跡出土の黒曜石は北海道白滝産、青森県深浦産、秋田県男鹿産、新潟県板山産、長野県小深沢産との結果が得られている。

出土事例は少ないが、山形県内出土の北海道白滝産黒曜石については、北海道から本州への一方的な移動を反映した（例えば、稲田孝司の提唱する植民<sup>29)</sup>）との可能性も否定できないものの、筆者は北海道と本州とを往還する広域移動を反映した可能性を考えたい。また、そうした動向の中で、本州における北方系細石刃石器群の形成と拡散、神子柴系石器群の形成<sup>30)</sup>があったのではないだろうか。

最後に、かつて、筆者は、立川ローム層最上部から暗褐色土層にかけての石器群については、野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群の後半期に、北方系細石刃石器群が南下し、その後、神子柴系石器群（以下神子柴型尖頭器石器群）から本ノ木型尖頭器石器群へと段階的に変化した編年を考えた<sup>31)</sup>。その後、千葉県内で同時期の石器群、特に六通神社南遺跡出土資料の類例を探索したものの、神子柴型尖頭器石器群の良好な資料は見あたらなかった。一方で、北方系細石刃石器群と本ノ木型尖頭器石器群は、新

たな出土資料も増えつつある。このことから、千葉県は、神子柴型尖頭器石器群の主たる分布範囲ではないのではないかと疑いが生じた。

それを踏まえて、筆者の現時点での考えをまとめると、以下のとおりである。

①東内野型尖頭器を特徴とする槍先形石器群に後続する石器群として、例えば千葉県南河原坂第3遺跡D地点や同有吉遺跡第4次第4文化層、四街道市池花遺跡第3文化層、船橋市西の台遺跡、大網白里市大網山田台No.1遺跡など、多様な槍先形石器群<sup>32)</sup>が、野岳・休場型細石刃核を指標とする細石刃石器群に先行、あるいは一部併行して存続する。この槍先形石器群が、南下した北方系細石刃石器群と接触することで、次期石器群が形成される。

②神奈川県では、長堀北遺跡をはじめ神子柴型尖頭器が多く、一方、千葉県では、南大溜袋遺跡に代表される本ノ木型尖頭器が顕著である。従前は、前者が古く、後者が新しいと考えられ、筆者もそう考えていたが、気になる点もあった。

③それは、神子柴型尖頭器は安山岩系石材が多く、原産地遺跡として山岳地帯の長野県佐久市八風山遺跡群などが該当し、本ノ木型尖頭器は黒色頁岩を中心とする頁岩やホルンフェルス、チャートなどが多く、原産地遺跡として河川近傍の東京都あきる野市前田耕地遺跡や新潟県津南町本ノ木遺跡などがある。両者は、石器石材だけでなく、遺跡の立地や環境、石器の形態と機能、生業に至るまで違いが想定され、前者から後者へ移行することに疑問があった。

④そこで、千葉県では、東北産頁岩を多用する北方系細石刃石器群の集団とそれまで継続していた槍先形石器群の集団との接触の後、植刃槍の石器化<sup>33)</sup>を含めて、本ノ木型尖頭器を特徴とする石器群が形成され、他地域で発達した神子柴型尖頭器とは時間的に併行すると考えるに至った。

本ノ木型尖頭器石器群は、千葉県内では地元の地域的の石器群であり、一方で、東日本全域にわたり、安定した型式的特徴をもつ神子柴型尖頭器が、山岳地域の石材原産地からもたらされる製品として流通したと考えられる。

## おわりに

土器出現期を前後する時期は、細石刃石器群を中心に、相当に広域で頻繁に移動する集団と、ナイフ形石器群の時期と大きくは変わらない範囲を移動する地域的な集団、また、原産地において石器製作に重点を置いた集団など諸集団が交錯し、六通神社南遺跡の石器群も広域移動の連鎖を背景に残されたものではないだろうか。

神子柴型尖頭器と本ノ木型尖頭器について、その出現の経緯を含めて、今後、さらに検討していきたい。

## 注

- 1) 財団法人千葉県文化財センター編 2003『千葉東南部ニュータウン26-千葉県椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡-』
- 2) 薬科哲男 2003「附章 六通神社南遺跡出土安山岩製石器の原産地分析」『千葉東南部ニュータウン26-千葉県椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡-』財団法人千葉県文化財センター、153-168頁
- 3) 島立 桂 2014「大型の槍先形石器について」『岩宿フォーラム2014/シンポジウム 石器の変遷と時代の変革-旧石器から縄文石器へ- 予稿集』岩宿博物館、48-55頁
- 4) 公益財団法人千葉県教育振興財団編 2014『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書4-八千代市東向遺跡・坪井向

遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡-』

- 5) 1990年度の発掘調査では、「縄文時代草創期」に帰属すると推定した資料を30点抽出したが、今回、槍先形石器1点以外は、東北産頁岩による石器に限定した。なお、千葉県内では、東北産頁岩を多用する石器群に、北方系細石刃石器群以外に、①立川ローム層Ⅶ層～Ⅵ層の石刃石器群、②東内野型尖頭器石器群、③細石刃石器群より古いと想定される槍先形石器群（池花遺跡第3文化層）、④神子柴系石器群、⑤縄文時代前期の石器群などがあることから、なお混在資料を排除できない。
- 6) 須藤隆司は、神子柴遺跡出土石器の使用痕分析と石器の形態から、尖頭器について、刺突機能をもつものと、切削機能をもつものに分けて検討している。  
須藤隆司 2008「神子柴型尖頭器の形態的枠組み-大型扁平両面調整石器の歴史の見方-」『神子柴 後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究-』林茂樹・上伊那考古学会、248-267頁
- 7) 吉朝則富 1999「(速報) 飛騨湯ヶ峰下呂石原産地における大型尖頭器製作址について」『長野県考古学会誌』第89号 長野県考古学会、68-69頁  
飛騨考古学会旧石器分科会 2001「飛騨・湯ヶ峰山麓の尖頭器資料」『飛騨と考古学Ⅱ-旧石器特集号-』飛騨考古学会、52-65頁
- 8) 豊岡卓之 1982「桜ヶ丘第3地点北方の尖頭器」『旧石器考古学』25、旧石器文化談話会、96頁  
なお、同じ二上山北麓にある中谷遺跡からは槍先形石器未成品と見られる石器が数多く採集されているが、弥生時代に帰属する石槍の未成品とされている。
- 9) 奈良県立橿原考古学研究所編 2020『勢野東遺跡-三郷中央公園多目的広場建設に伴う発掘調査-』
- 10) 岩宿博物館編 2018『岩宿博物館 第66回企画展 石槍-時代を変えた石器のライフストーリー-』
- 11) 財団法人千葉県文化財センター 1985『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-』
- 12) 野田市本郷遺跡調査団 1980『野田市本郷遺跡発掘調査報告書』  
田村 隆・橋本勝雄 1987年「野田市本郷遺跡A地点」『房総考古学ライブラリー1 (先土器時代)』財団法人千葉県文化財センター 89-92頁
- 13) 財団法人千葉県文化財センター編 1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡-佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-』
- 14) 財団法人千葉県文化財センター編 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ-東峰御幸畑西遺跡(空港No.61遺跡)-』
- 15) 財団法人山武郡市文化財センター編 1994『大網山田台遺跡群-旧石器時代篇-』
- 16) 後野遺跡調査団編 1976『後野遺跡-関東ローム層中における石器と土器の文化-』茨城県勝田市教育委員会
- 17) 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 1993『川本町白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡 川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告-Ⅲ-』
- 18) 宇野修平・上野秀一 1975「角二山遺跡」『日本の旧石器文化 2 遺跡と遺物 <上>』(麻生優・加藤晋平・藤本強編) 雄山閣、96-111頁
- 19) 財団法人千葉県文化財センター編 2005『国道道路改築委託(久留里)埋蔵文化財調査報告書-君津市富田田面遺跡・向郷菩提遺跡-』  
橋本勝雄 2011「関東最南端の北方系細石刃石器群-君津市向郷菩提遺跡と袖ヶ浦市東上泉遺跡出土資料の再評価-」『研究連絡誌』第72号、財団法人千葉県教育振興財団、45-50頁  
橋本勝雄 2020「周辺地域から見た北方系細石刃石器群の技術的特性とその背景-北方系集団の南下に伴う石器群の技術的変容-」『旧石器考古学』84、旧石器文化談話会、1-9頁
- 20) 相武考古学研究所編 1991『長堀北遺跡』大和市教育委員会
- 21) 神奈川県教育委員会編 1980『寺尾遺跡 県立綾瀬高等学校建設にともなう調査』
- 22) 相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団編 1993『勝坂遺跡第45次調査-相模原市市道磯部上出口改良事業に伴う埋蔵文化財調査-』

- 23) 朝日村教育委員会編 1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書V-樽口遺跡-』
- 24) 島立 桂 2004「関東地方における土器出現期石器群について」『考古論集(河瀬正利先生退官記念論文集)』河瀬正利先生退官記念事業会編、55-70頁
- 25) 六通神社南遺跡における槍先形石器群と東北産頁岩による石器群との関係について、報告書では留保したが、綿貫俊一は、下記文献で、別々の石器群であるとの見解を表明している。  
綿貫俊一 2011「千葉県六通神社南遺跡の石器類」『大分県立歴史博物館 研究紀要』12、31-34頁  
その後、筆者も同じ見解で発表した。文献注3)。
- 26) 田村 隆 2003「林小原子台再訪-東部関東における長者久保-神子柴石器群-」『考古学』I、安斎正人、1-51頁・田村 隆 2005「付章I 向郷菩提遺跡の石器群について」国道道路改築委託(久留里)埋蔵文化財調査報告書-君津市富田田面遺跡・向郷菩提遺跡-』財団法人千葉県文化財センター、86-90頁
- 27) 戸田哲也 1973「千葉県南大溜袋遺跡の調査」『考古学ジャーナル』第78号、ニュー・サイエンス社、16-17頁  
戸田哲也 2000「南大溜袋遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』財団法人千葉県史料研究財団編、千葉県、259-261頁  
田村 隆・橋本勝雄 1987年「印旛郡富里村南大溜袋遺跡」『房総考古学ライブラリー1(先土器時代)』財団法人千葉県文化財センター、162-170頁  
財団法人千葉県文化財センター編 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV-元割・聖人塚・中山新田I-』  
財団法人千葉市文化財調査協会編 1992『土気南遺跡群II 弥三郎第2遺跡』
- 28) 建石 徹・加藤 稔・渋谷孝雄・会田容弘・小菅将夫・二宮修治 2014「山形県湯の花遺跡出土黒曜石資料の産地分析」『岩宿』第3号、岩宿博物館、7-15頁  
加藤 学 2018「中部地方北部における後期旧石器時代の石材利用-黒曜石の動態に関する検討-」『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会編、株式会社六一書房、347-363頁  
渋谷孝雄・佐々木繁喜 2018「山形県内から出土した旧石器時代から縄文時代草創期の黒曜石製石器の産地同定とその意義」『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会編、株式会社六一書房、323-345頁
- 29) 稲田孝司 1993「細石刃文化と神子柴文化の接点-縄文時代初頭の集団と分業・予察-」『考古学研究』第40巻第2号、考古学研究会、21-46頁  
稲田孝司 2001「細石刃文化の波及から縄文文化の成立へ」『遊動する旧石器人(先史日本を復元する1)』岩波書房、115-163頁
- 30) 森嶋 稔 1967「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」『信濃』第19巻第4号、信濃史学会、33-35頁  
森嶋 稔 1986「神子柴型尖頭器とその周辺之二、三の課題」『長野県考古学会誌』52号、長野県考古学会、46-48頁  
安斎正人 2002「「神子柴・長者久保文化」の大陸渡来説批判-伝播系統論から形成過程論へ-」『物質文化』第72号、物質文化研究会、1-20頁  
谷口康浩 2003「長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係-段階編年論を脱却した移行期研究の現在-」『シンポジウム 日本の細石刃文化II-細石刃文化研究の諸問題-』ハヶ岳旧石器研究グループ、171-192頁
- 31) 注24)と同じ。
- 32) 注15)と同じ。このほかに下記の文献がある。  
船橋市遺跡調査会編 1985『西の台(第2次)-船橋市西の台遺跡発掘調査報告書-』  
財団法人千葉県文化財センター編 1991『四街道市内黒田遺跡群-内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』  
財団法人千葉県文化財センター編 1999『千葉東南部ニュータウン21-千葉市有吉遺跡(第4次)・高沢古墳群-』  
財団法人千葉市文化財調査協会編 1996『土気南遺跡群V 南河原坂第3遺跡』
- 33) 橋本勝雄 2012「本ノ木型尖頭器総論-槍と植刃器のかかわり-」『研究紀要』第9号、財団法人印旛都市文化財センター、1-30頁